

復活節第3主日 (ルカ 24:13-15)

起こったことを、あなただけをご存じなかったのですか



その人の得意な話を引き出すには、「その分野と無関係な人のふりをする」のがいちばんですね。たとえばですが、バスケットボールが好きな人に、「一回シュートが入ると何点ですか？」と聞けば、その人は得意になって、この線の中でシュートを決めれば2点、この線の外からシュートすれば3点、審判に反則を取られると、シュートが与えられることがあるなど、それはもう自慢げに話をするでしょう。ルールが難しいラグビーやアメリカンフットボールになればなおさらのことです。

しかし、その人が知らずに説明していた相手が熱心なファンであったり、はるかに知識が豊富であれば、返ってくる言葉があまりにも正確で、普通なら自分が得意になって話したことを恥ずかしく思うでしょう。エマオに向かって歩いている二人の弟子がそうでした。

復活したイエスが近づいて来て、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と言われ、「エルサレムに滞在していながら、この数日そこで起こったことを、あなただけをご存じなかったのですか」と返し、何も知らずに起こった出来事を語りだすのです。イエスが説明してくださる番になったとき、本来なら穴があったら入りたいくらい恥ずかしい思いをしたことでしょう。

こんなことがありました。前任地の教会で百周年事業が計画され、記念碑をあらためて建てようとなり、業者が下見に来ました。そこに来ていた業者の人は、とある教会に所属するカトリック信者でした。私は半ズボンにパーカーという格好で作業を眺めていたのですが、作業もそこそこに、所属する教会の主任司祭の悪口を腹いっぱい言い始めたのです。私はできるだけ聞かないようにと心の耳をふさいでいました。

それなのに、私がそばに立っていることに気づいた石材業者が、「やっとなれんぞ。あがんとは神父じゃなかよ。そがん思わんね？ 兄ちゃん」と聞いてくるものですから、返事に困ってしまいました。

「私もこんな格好をしているけれども神父しとるけん、他所の教会のことはあれこれ言われんもんね。そんな神父さんば見ても信者ば辞めんとやけん、おたくたちはすごかばい」と言うのと「ありや、神父さんやったとですか。今んとは聞かんやったことにしてください」と言って、それからは作業を黙々と続けてくれました。

神父に見えない格好をしていたので、実情を聞かされる羽目になりました。けれども、「あんたたちは偉かばい」と励ましたので、今後信仰を投げ出したりはしないと思います。

悪口を腹いっぱい言った信者でしたが、記念碑の土台を組む中で根掘り葉掘り投げる質問には、自信たっぷりに説明してくれました。「祈りしか知らない神父」が、世間の話をも熱心に聞いてくれた。よほど嬉しかったのか、次からは決して某神父様の悪口は言わなくなりました。

「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、

わたしたちの心は燃えていたではないか」(ルカ 24・32)。半ズボンに、パーカーを着た神父でしたが、小さな灯火は灯せたのかなと思っています。土台の完成まで何度か来てくださった信者の業者の方々は、諦めかけていた信仰でしたが、何とか踏みとどまってくれました。ひょっとすると、「神父も捨てたもんじゃなかぞ」と、どこかでだれかに話してくれるかもしれせん。

「わたしたちの心は燃えていたではないか」復活したイエスは、出会う人よりも身を低くしておいでになり、その人の中に灯火を灯してくださいます。失望していた人たちが、希望をもってエルサレムに帰ったのは、復活したイエスが身を低くしてお尋ねくださったからです。

イエス様が「何の話をしているのか言ってみろ」と声をかけていれば、彼らは恐れを感じ、何も答えなかったかもしれせん。信仰を表明することになりますから、まだ捕らえられる可能性もあったはずです。身を低くして尋ねること。知らないふりをする。もっと言えば、バカの真似をすることでしょうか。

復活したイエスと同じように人に振る舞えば、その人は自分をさらけ出し、話しかけた人のほうが優れていると知った瞬間に、声をかけてくれた人のことを皆に伝えます。あなたの周りに、身を低くして尋ねてくる人がいないでしょうか。その人は復活したイエスから遣わされた人です。その人に出会って、「この話をあなただけは知らなかったのですか」と、つい言ってしまふかもしれせん。

最終的に、身を低くして尋ねた人が復活したイエスから遣わされた人だと気づき、私たちは胸が一杯になって、復活したイエスを証しするのは。私にも、復活したイエスが身を低くしておいでくださった」と。

しかし、そう何度も、復活したイエスが身を低くしておいでになり、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と尋ねるのでしょうか。心配はいりません。あなたがミサに来るたびに、イエスは私たちすべてのために身を低くしておいでくださるのです。パンとなり、裂かれて、私たちの食べ物になってくださるからです。ここに、身を低くしておいでくださった方がおられ、「やり取りしているその話は何のことですか」とお尋ねになるのです。

ミサの間に、私たちは何を話し、何をやり取りしているのでしょうか。「あの方こそイスラエルを開放してくださると望みをかけていた」その話でしょうか。それとも、「あー、早くミサの終わらんかなあ」という話でしょうか。今日も復活したイエスは、みことばとパンによって身を低くしておいでくださり、私たちを送り出してくださいます。私たちは派遣されたことを忘れずに、一週間を生きていくべきです。

復活節第4主日(ヨハネ 10:1-10)